

“Saint Katy the Virgin”に関する一考察

加藤光男

1

“Saint Katy the Virgin”は1936年12月 Covici and Friede 社から署名入り 199部限定で出版されたが、翌1937年出版予定であった *Of Mice and Men* の宣伝も兼ねた、クリスマス用ギフトとして無料で配布されたものである。好評であり、1937年11月7日付の Steinbeck のハガキには “No copies of “Saint Katy” are available at any price” と書かれている。⁽¹⁾ 1938年に短編小説集 *The Long Valley* が出版された時に他の作品群と全く趣きを異にしているにもかかわらず、その中に加えられたのはそのためであったようだ。その間のいきさつについて以下の Sanford E. Marovitz の論文と、Jackson Benson の伝記 *The True Adventures of John Steinbeck, Writer* からの言及には若干のニュアンスの差はあるが、Steinbeck は積極的にこの作品を *The Long Valley* に加えたことがわかる。

Probably because the small limited edition had been so well received, Steinbeck willingly complied with his agent's request to bring the satirical tale back into print the following year as one of the stories in *The Long Valley*.⁽²⁾

Then he insisted on including it in his collection *The Long Valley*, even though it is so different in kind from the other items that the reader hardly knows what to make of it.⁽³⁾

このように “Saint Katy the Virgin” は1936年に出版されたものであるが、それよりも早く1932年5月17日付の出版社に宛てた Steinbeck の手紙にこの作品についての言及があり、文面から見てそれより以前から手がけていたことがわかる。彼の第1作 *Cup of Gold* は1931年8月、第2作の *To*

a God Unknown は1932年10月の出版であるから、これらの長編小説とほぼ同時期に書かれたものであり、当然 *The Long Valley* の中では最も古いものと言える。興味深いことは、Steinbeck 自身その手紙の中で “She (i.e. “Saint Katy the Virgin”) was a pleasant afternoon to me,”⁽⁴⁾ と書いていることである。その理由は “Saint Katy the Virgin” が最初の長編小説を書いている際の気分転換として、極めて深刻になり得る問題を中世を舞台に、豚を主人公に仕立てた風刺物語として取上げ、腹をかかえて笑うことができる、満足のいく作品に仕上げることができたからであろう。

このような作品を発想するにはラブレアの「ガルガンチュア物語」やジョーサーの「カンタベリー物語」などがそのもとにあると考えられるが、直接の動機はスタンフォード大学在学中の1925年に聞いた「ヨーロッパ思想及び文化」の講義である。その講義の中でカトリックの死者の列聖に関して様々な矛盾のある事例について聞いた学生達は最も聖人になれそうもないものを選び、話しを作って楽しんだという。Nelson Valjean はこの間のことを次のように書いている。

Sometimes after class the students on their own reviewed ancient hagiography and read corollary material. One unrelated account that appealed to them was the fiction by Anatole France about the nearsighted priest who rejoicingly baptized a flock of penguins which he mistook for people. So great were these varied influences that the students made a game of choosing the most unlikely candidates imaginable for sainthood. John chose a pig, a mean thief of a pig who was turned from her sinful ways into channels of righteousness and a worker of miraculous cures. The story, written in school probably for the pleasure it gave him, showed Steinbeck's early versatility in selection of subject matter, style, and presentation. It isn't known what changes were made in the manuscript prior to the eventual publication of *St. Katy the Virgin*, but Fenton vaguely recalls that the original was in verse form.⁽⁵⁾

このように大学時代の遊びがやがて現在の形へと結実していったのであるが、その軽やかな笑いは Steinbeck の多才な一面を示していると同時に作家

を志す若者の真情が込められていると考えられる。この小論では物語を辿りながらその笑いの中に含まれる意味を分析し、Steinbeck の心情を探っていききたい。

2

“Saint Katy the Virgin” の冒頭の節は次のように始まる。

IN P—— (as the French say), in the year 13—, there lived a bad man who kept a bad pig. He was a bad man because he laughed too much at the wrong times and at the wrong people. He laughed at the good brothers of M—— when they came to the door for a bit of whiskey or a piece of silver, and he laughed at tithe time. When Brother Clement fell in the mill pond and drowned because he would not drop the sack of salt he was carrying, the bad man, Roark, laughed until he had to go to bed for it. ... In addition he called people fools, which is unkind and unwise even if they are. Nobody knew what made Roark so bad except that he had been a traveler and seen bad things about the world.⁽⁶⁾

このようにこの短編小説は中世のフランスを舞台に悪い豚 (bad pig) を飼う Roark という男の描写から物語が始まる。彼は性悪な男 (bad man) だという。「笑ってはいけない時に笑ったり、笑ってはいけない人を笑ったりする」からである。例えば「M修道院の立派な修道士達 (good brothers) が、わずかばかりのウイスキーや金を無心に玄関に来たり…… 10分の1税を集める時……Clement 修道士が水車池に落ちて、持っていた塩袋を手放そうとしなかったために溺れ死んだとき」などである。「それに、彼は世間の人達を馬鹿呼ばわりをした」からでもある。このようにこの節を読むだけで物語の調子が見えてくる。

Roark が性悪な男であるという説明には全く説得力がない。それどころか立派な修道士達の方に問題があることにすぐ気付く。特に塩袋を手放さなかった Clement が代表しているように地上の富、ないしは世俗的なこというつつを抜かしている魂の指導者たる教会人に対する批判であろう。次に彼

に馬鹿 (fool) 呼ばわりされる世間一般の人達についてであるが、馬鹿呼ばわりすることは良くないことだと書かれている。その理由は「たとえ彼らが馬鹿であっても、それは思いやりのないことであり、又賢いことではない (unwise)」からである。この unwise という形容詞によって暗示されるように世間一般の人達は「賢い」ので広く世間を見たり、深く考えたりすることなく、神父や修道士の言いなりに10分の1税を納め波風の立たないように生活しているわけで、ここにはそのような傾向への揶揄が含まれていると言うことができる。

彼が性悪になった理由のひとつは、「彼が長いこと旅をしていて、世の中の悪事を沢山見てきた」からであったというのも実におかしな理由である。実際は彼が広く旅をしたことによって、事の善悪是非が良くわかるようになり、教会も含めて社会のさまざまな矛盾や人間の心の中の愚かしい面が見えてしまうのであるから。

このような訳で彼が笑うのは人間性の弱点がはっきりとあらわれた時であり、彼があざ笑う人達とは教会という権威によりかかり、偽善的信仰にあけくれている神に仕える人達のことであり、さらにそこに何ら疑問を感じないで賢く振舞っている教区民である。こう考えてくると Roark だけが唯一のまともな人間に見えてくるのである。しかし、この Roark は Katy を登場させるためのきっかけであり、これ以上の発展がないのは残念な気がするが、物語の導入部として調子を整える役割を充分にはたしている。第2節から Katy が姿を現わす。

主人公 Katy は牝豚であるがその極悪非道ぶりは並大程ではない。母親の乳をひとり占めにし、兄弟たちより倍も大きくなって、しまいには彼らを食ってさえしまった。やがて、近所の鶏や家鴨を食い殺したり、ときには人間の子供達を襲い、ついには自分の生んだ子供でさえ一匹残らず食ってしまった。これではもう Roark にしても飼っておくことができず、屠殺しようとしていた。丁度その時教会の集税人達が来たので10分の1税として教会に

渡して厄介払いをすることに決めた。

もともと Katy の血統にはそのような悪い血が流れていたわけではないという。それは Roark が子豚に名前をつけた時に端を発する。

—turn over you little devil!—you’re Katy,” and from that minute Katy was a bad pig, the worst pig, in fact, that was ever in the County of P——. (190)

“you little devil!” と呼ばれた瞬間から悪魔に取りつかれ大悪党になったのであるから、まことに「始めに言葉ありき」である。このあたりにも創世紀を始めとする聖書への揶揄が見え隠れする。ちなみに *East of Eden* の魔女かとさえ思える女性主人公の名前は少女時代は Catherine あるいは Cathy であり、後に Kate と呼ばれているが興味ある符合である。

さて2人の修道士 Colin と Paul が10分の1税として Katy を修道院に連れていく途中で、Katy は本性を現わした。Colin のふくらはぎの肉をかじり取り、Paul の足蹴をものともせず、彼等を木の上に追い上げてしまった。困りはてた Paul が悪魔払いの呪文を投げかけたが、効果がないので十字架を Katy の前にぶらさげた。

He unwound his girdle, and to the end of it tied the chain of his crucifix; then, leaning back until he was hanging by his knees, and the skirts of his robe about his head, Paul lowered the girdle like a fishing line and dangled the iron crucifix toward Katy.

As for Katy, she came forward stamping and champing, ready to snatch it and tread it under her feet. The face of Katy was a tiger’s face. Just as she reached the cross, the sharp shadow of it fell on her face, and the cross itself was reflected in her yellow eyes. Katy stopped—paralyzed. The air, the tree, the earth shuddered in an expectant silence, while goodness fought with sin.

Then, slowly, two great tears squeezed out of the eyes of Katy, and before you could think, she was stretched prostrate on the ground, making the sign of the cross with her right hoof

and mooring softly in anguish at the realization of her crimes.
(196)

「十字架の鋭い影が彼女の顔の上に落ちた」と同時に彼女は罪に眼覚めるのであるが Paul は木の上から自由になる方の手で手ぶりを交えながら木の下に這いつくばってうめいている Katy に向って美しいラテン語 (beautiful Latin) で山上の垂訓 (the Sermon on the Mount) を説いた。それが終わった時, Katy はすっかり悔改めていたという。

there was complete and holy silence except for the sobs and sniffles of the repentant pig. (197)

このようにして Katy から悪魔が追出され, 彼女は従順なクリスチャンになるのであるが, この改心劇は読者を大いに笑わせると同時に, いともたやすく行なわれる改心という行為に対して疑いの眼を向けさせる。

この一部始終を目撃していた Roark にも神の恵みをもたらされた。

From that day on, he was no longer a bad man; his whole life was changed in a moment. (196)

彼も瞬時にして悪人ではなくなっていたのである。彼の改心については先に述べたように「悪人」には逆説的意味があるので, ここにも風刺が込められていると考えられる。

悔い改めた Katy は修道院に入りその後の彼女の生活は善行の長い記録であった。そして, ある朝聖人にしかできない途方もないことをなし遂げた。

On the morning in question, while hymns of joy and thanksgiving sounded from a hundred pious mouths, Katy rose from her seat, strode to the altar, and, with a look of seraphic transport on her face, spun like a top on the tip of her tail for one hour and three-quarters. The assembled Brothers looked on with astonishment and admiration. This was a wonderful example of what a saintly life could accomplish. (198)

「尻尾の先で立って1時間45分の間コマのようにくるくる回った」というこ

のエピソードは先に述べたスタンフォード時代の講義で聞いた以下に引用する柱頭行者 Simeon に発想を得ているようである。Katy の^{ぎょう}行の荒唐無稽さ加減に風刺の度合が読みとれる。

John was amused when the teacher, an outspoken agnostic, touched upon cannonization. One account involved Simeon Stylites, who worshipfully stood atop a pillar for seven years, pointing heavenward and sustained only by faith and donations of food. When finally back on the ground, poor Simeon couldn't lower his arm, but the plight paid him the dividend of sainthood.⁽⁷⁾

そしてこれに続くもうひとつの話が次に取り上げる Katy の処女性についての着想を与えているかもしれない。

Another example, and the one John liked best, concerned Mary of Egypt, a former actress and courtesan. To atone for her sins, she headed for Jerusalem to worship. Coming to a river, she was unable to pay ferry charges across, but the ferryman impiously offered to ferry her over in exchange for her newly acquired virtue. Mary agreed. And because she so willingly sacrificed her “jewel of great price” for a cause so glorious, Hulme concluded, she too was sainted.⁽⁸⁾

それ以来M修道院は巡礼の場所になり、彼女の死後もその徳により婦人病やタムシの人々を直し続け、50年たった時に彼女を聖人の位につかせ Saint Katy the Virgin と名付けようということになった。しかし彼女の処女性に問題ありということで委員会が設けられ、その委員会は判断をある公平、博識な床屋にまかせた。

“It is a delicate question,” said the barber. “You might say there are two kinds of virginity. Some hold that virginity consists in a little bit of tissue. If you have it, you are; if you haven't, you aren't. This definition is a grave danger to the basis of our religion since there is nothing to differentiate between the Grace of God knocking it out from the inside or the wickedness of man from the outside. On the other hand,” he

continued, "there is virginity by intent, and this definition admits the existence of a great many more virgins than the first does. (199)

彼の考え出したこの判定法にもとづいて委員会は "Katy had without doubt been a virgin by intent." (199) 即ち彼女は「意志による処女」であると結論を下した。このような教会当局のご都合主義は噴飯ものであるが、教会の長い歴史の中にはいかにも有りそうな事例のように思えて自然に、にやりとしてしまう。

Katy の極悪非道ぶりと改心、奇蹟と列聖、そして処女性についてのエピソード、これらは Steinbeck の独創的話というよりも学生時代あるいはもっと小さい頃から教会についてからかう時など、誰にでも経験のある格好の話題であったのではないだろうか。しかし現実には「処女だれそれ」と呼ばれるのは聖母マリアが代表であり、その点にこそ風刺の主眼があるはずである。この物語の持っているこっけいさもその点にある。カトリック教会に対する最大の揶揄であるわけだが、このような形で取り上げたのでは議論にもならず、唯、笑うだけである。そこにこそ Steinbeck のねらいがあったのであろう。

次に教会人についてのエピソードを取上げたい。

先出の修道士 Colin と Paul は立派な収税チームである。善良な Colin の説得と、からだ中に信仰心をみなぎらせた Paul の地獄の業火によるおどしとで大ていの方は税を収めた。そして取り立て不可能と思っていた Roark から豚をせしめた時の 2 人の反応は次のようであった。

The Brothers hurried over to the sty and looked in. They noted the size of Katy and the fat on her, and they stared incredulously. Colin could think of nothing but the great hams she had and the bacon she wore about like a top coat. "We'll get a sausage for ourselves from this," he whispered. But Brother Paul was thinking of the praise from Father Benedict when

he heard they'd got a pig out of Roark. Paul turned away.
(192-193)

Colin はハムやベーコンを思い、Paul は修道院長の褒美を思ったのであり、彼等は収税という行為を極めて個人的な、極めて世俗的な意識でやっているのである。しかし、修道院長 Benedict 神父は彼等以上に俗物であり、彼の反応はまことにみごとである。彼は厳しく次のようにたたみかける。“Who was it converted this pig?” ... “You are a fool,” ... “We can't slaughter this pig. This pig is a Christian.” ... “There are plenty of Christians. This year there's a great shortage of pigs.” (197-198) ここには良き牧者としての良心のかけらも見られない。日頃熱心に信徒に向って説く時とは全く裏腹で、天国よりは地上のことがはるかに重大事なのである。

このエピソードも修道院とか教会とかいう組織には良くありそうな断面であり、それに対する痛烈な批判である。さらにそのような者の統べる教会に通う“wise”な信徒に対する風刺も含まれているであろう。彼等はこのような聖職者達に心の平安をあずけ、来世のために汗水流して彼等を養っているのであるから。圧巻は物語最後の描写であり、教会という組織に対する思いの丈が込められている。

In the chapel at M—— there is a gold-bound, jeweled reliquary, and inside, on a bed of crimson satin repose the bones of the Saint. People come great distances to kiss the little box, and such as do, go away leaving their troubles behind them. This holy relic has been found to cure female troubles and ringworm. There is a record left by a woman who visited the chapel to be cured of both. She deposes that she rubbed the reliquary against her cheek, and at the moment her face touched the holy object, a hair mole she had possessed from birth immediately vanished and has never returned. (199-200)

このようにして“Saint Katy the Virgin”には悪魔に魅入られ悪業を重ねていた Katy が聖人として崇められるようになる過程が見事に描かれ、それ

を演出する教会と、それを当然のこととして受入れる信徒達に対する痛烈な風刺がそこにはある。もちろん大笑いの中にはあるが。その風刺の矛先が西洋文明の土台ともいべきキリスト教に向けられていることに注目して良いのではないだろうか。1930年代という時代の中にこの作品を置いた場合、キリスト教が精気を失い、本来果すべき役割を十分に果していないことへの警告をも読みとることができる。

Steinbeck の文学にとって宗教は大きなテーマであるが、彼には権威と形式に頼る組織立ったものよりは、個人が直接的に関わることができる、より自然なものへの指向を見ることができる。この点についてももう少し考えを進めていきたい。

3

Nelson Valjean によれば Steinbeck は大学時代熱心に聖書を読むことはあったが、宗教的理由からではなく、文体とか文学としての関心からであった。そして在学中に一度も教会や聖堂に足を運んだことはないという。このように当時の彼にはさほどの信仰心はなかったようであるが、その理由の一端はこの短編小説にもあったように、熱心な信徒に支えられた教会という組織そのものに馴めないものがあったと思われる。そのひとつの裏付けとして“Saint Katy the Virgin”と同じ頃に書かれた彼の第2作 *To a God Unknown* と彼の最大の傑作 *The Grapes of Wrath* に見られるエピソードを例に考えてみたい。

To a God Unknown の主人公 Joseph は既成の宗教にとらわれずに異教的とも思える信念をもって一族の王国である牧場を完成しようとしている。一方、彼の兄 Burton は次に引用するように日常よく見かける熱心な信徒の理想像である。

Burton was one whom nature had constituted for a religious life. He kept himself from evil and he found evil in nearly all close human contacts.⁽⁹⁾

しかし、Joseph の理想とするところとは全くかけ離れていて、彼の心情を理解できず、彼を異教徒であると決めつけ、農場を去る。その時の Burton の言葉も彼の人柄を良く表わしている。

“I’ve tried to lead an acceptable life. What I have done I have done because it seemed to me to be right. There is only one law. I have tried to live in that law. What I have done seems right to me, Joseph. Remember that. I want you to remember that.”⁽¹⁰⁾

このように Burton にとって人生には神という唯一の価値観しか存在しないのである。そして彼はそれを他人にも強要する。引用の “What I have done” と言うのは、死んだ父親の魂が宿る木として Joseph の大切にしている柏の老木が枯れれば、Joseph の迷いは覚めると確信して根元の樹皮をむいてしまったことを指している。もちろん Joseph はそのことを知るよしもない。やがてその木は枯れ、これが Joseph の王国が崩壊し、Joseph の死へと発展するひとつの伏線となるのである。これは Burton のひとりよがりの信念のなせる業であり、Steinbeck が Burton に代表されるような信徒で成立している教会という組織や教義に若者らしい疑問を感じていたことが良くわかる。

さらに Steinbeck は同じような教会あるいは信徒達に対する告発を 1939 年出版の *The Grapes of Wrath* の中で明瞭に描いている。第 22 章の Jode 一家が国設キャンプに辿りつき、そこで毎週土曜日に開かれるダンスパーティーに参加するくだりである。そこにも狂信的な信徒の集団がいて Ma や妊娠している娘の Rose of Sharon を脅す。次の引用は信徒の Mrs. Sandry が初対面の Ma に話しかけているところである。

“Are you happy in the Lord?”

“Pretty happy,” said Ma.

“Are you saved?”

“I been saved.” Ma’s face was closed and waiting.

“Well, I’m glad,” Lisbeth said. “The sinners is awful strong aroun’ here. You come to a awful place. They’s wicketness all

around about. Wicket people, wicket goin's-on that a lamb'-blood Christian jes' can't hardly stan'. They's sinners all around us."

Ma colored a little, and shut her mouth tightly. "Seems to me they's nice people here," she said shortly.

Mrs. Sandry's eyes stared. "Nice!" she cried. "You think they're nice when they's dancin' an' huggin'? I tell ya, ya eter-nal soul ain't got a chancet in this here camp. Went out to a meetin' in Weedpatch las' night. Know what the preacher says? He says, 'They's wicketness in that camp.' He says, 'The poor is tryin' to be rich.' He says, 'They's dancin' an' huggin' when they should be wailin' an' moanin' in sin.' That's what he says. 'Ever'body that ain't here is a black sinner,' he says. I tell you it made a person feel purty good to hear 'im. An' we knowed we was safe. We ain't danced."⁽¹¹⁾

Mrs. Sandry がダンスを厭うさまには哀れを感じるが説教師が「貧しき者が富める者になろうとしている」と説くことには憤りすら覚える。現世における自然な欲望すら一切認めることができない狭量な教条主義は恐ろしいと同時に信徒達には同情を禁じ得ない。この引用のあと Ma は怒って Mrs. Sandry を追い払おうとするが彼女はさらに Rose of Sharon の体内の子供にさえも悪態をつく。結局彼女は Ma の剣幕に圧倒され、てんかんの発作を起こすのだが、後になっても Rose of Sharon につきまとったり、救いようのない狂信的ふるまいを続ける。

これはまことに先出の *To a God Unknown* の Burton に見られるものと同じであり、*To a God Unknown* は 1932 年 *The Grapes of Wrath* は 1939 年の出版であるから、少なくとも 30 年代を通じて Steinbeck は同じ思いを抱き続けていて、Ma の怒りという形でそれを表現したのであろう。それは又彼が "Saint Katy the Virgin" で笑いの中にほのめかしていたものであり、それを明白にそして、より先鋭化した状態で提示しているのである。

このように、"Saint Katy the Virgin" を *To a God Unknown*, *The Grapes of Wrath* との同一線上に並べてみると、この風刺物語が明らかに社会的広がり、思想的な深みを増してくるのである。Steinbeck は教会や信徒への風刺をすると同時に、先に書いた Joseph のように原始宗教的思想

にひとつの光明を見い出そうとしているのであり、彼の意図の中には人々の心を救う新しい流れ、アメリカの再生に役立つ何かが生れて欲しいと願う心が込められ、やがては *The Grapes of Wrath* に行きつく理想主義者としての Steinbeck の若い萌芽が屈折した形で表現されていると考えられるのである。

彼はそれから 30 年余りたった 1962 年 *Travels with Charley* の中で教会に対して大学時代とは全く違った面を見せてくれる。

The Service did my heart and I hope my soul some good. It had been long since I had heard such an approach. ...

I felt so revived in spirit that I put five dollars in the plate, and afterward, in front of the church, shook hands warmly with the minister and as many of the congregation as I could. ...

All across the country I went to church on Sundays, a different denomination every week, but nowhere did I find the quality of that Vermont preacher. He forged a religion designed to last, not predigested obsolescence.⁽¹²⁾

Steinbeck は Vermont 州の牧師あるいは教会の日常については全く触れることなく、烈火のごとき説教と礼拝の後、すがすがしい気分になり、5ドルを献金し、牧師と握手したことも記している。これらの行為は“Saint Katy the Virgin”の中で彼が揶揄し、拒否したもののそのものであるように思えるのだが、しかし彼が風刺していたのは組織だった宗教であり、決して神そのものでも宗教そのものでもなかった。そして彼が求めていたのは本当の意味での人間の救済となるものであった。それで彼には「毎週別の教派」の教会に行くのも一こうにかまわなかったし、又「ヴァーモントの牧師は長持ちのする宗教をこしらえてくれた」と書いているのも同じ線につながっているのである。このように彼の宗教に関する信念は一貫したものであり、真に人間の救済につながるキリスト教の再生を願っていたのであり、そのひとつの現れを「ヴァーモントの牧師」に見たのであろう。

“Saint Katy the Virgin”が *The Long Valley* の中では場違いな印象を与えることは先に書いた通りであるが、このようにこの風刺物語に寄せる

Steinbeck の意図を辿ってくると初期の作品の中であってそれなりの位置を占めていることが理解できる。さらに Sanford E. Marovitz の “Saint Katy the Virgin” 冒頭の伏字に関する推論は、この作品の同時代性について興味ある示唆を与えてくれる。

この作品は「13一年, P一郡…M一修道院…」と始まっているが、13一年は彼がこれを書いていたと思われる1931年の後半の数字を逆にしたものであり、P一郡のPはSteinbeckが1930年に結婚して新居を構えた町 Pacific Grove のことであり、M一修道院のMは彼の最も敬愛した友人 Edward F. Ricketts の研究所のあった Monterey の町あるいは郡であると考えられることができるというのである。そして、先出の Burton が参加する修練会 (camp meeting) の場所も同じように Pacific Grove となっている。もしかすると Steinbeck はそのような集会を見聞きしていたのかもしれないし、全くの推量ではあるが、P郡, M修道院というだけで、にやっとするような衆知のことがあったのかもしれない。そうであるとすると、“Saint Katy the Virgin” は中世に舞台をとりながらも、*The Long Valley* の他の作品と同様に California の物語であり、現代という時代性と、現代のキリスト教に対する視線を含んでいることがさらに明瞭になってくるのである。そういう意味では *The Long Valley* の中でも、それなりの位置を占めているといえる。

4

“Saint Katy the Virgin” is an altogether delightful tale that even Chaucer’s Reeve or Miller would have been proud to present as his claim to the free dinner.⁽¹³⁾

この Peter Lisca の評の通り、この作品は「全く愉快な話」であり、彼の他の作品群とは違った彼の多才さの記念碑である。さらにその笑いの中には今迄分析してきたように、彼のキリスト教、特に組織だった教会についての批判が込められているがそれは彼の一貫した信念であった。この作品の中では風刺の対象として用いたものを *To a God Unknown* では Joseph の農場と

いう限られた世界の中で描き、*The Grapes of Wrath* の中ではより一般的に、より明瞭な形で表現しているのである。

しかしこの批判や風刺の根底には同胞と祖国アメリカに寄せる愛情がある。*The Grapes of Wrath* で食うや食わずのオーキー達がダンスパーティーを開きささやかに人間性を回復しようとしているひと時でさえ監視を続ける狂信的信徒達には憐憫の情を禁じえないが、その感情は Jode 家の人達に感じる同情の念と同質のものに変化し、やがて全ての同胞をつつむ愛情へと高揚していく。それは物語最後の Rose of Sharon が瀕死の老人に授乳するエピソードに端的に表現されている。これは Steinbeck のアメリカ及びアメリカ人に対する愛情に由来するものである。このような、人々への Romantic で楽天的愛情、人生に対する真摯な対応が彼の文学の根幹にあるもののひとつなのである。

以上他の作品を引用しながら“Saint Katy the Virgin”の風刺の根底にあるものについて考えてきたが、Steinbeck にとってこの作品は出版に意欲を燃やし、*The Long Valley* の中にも入れるぐらい強い愛着を感じた、存在感のある作品であったと考えられるのである。

注

- (1) Sanford E. Marovitz, “The Cryptic Raillery of ‘Saint Katy the Virgin’”, *A Study Guide to Steinbeck’s The Long Valley*, ed. Tetsumaro Hayashi (Ann Arbor, MI.: The Pierian Press, 1976), p. 73.
- (2) *Ibid.*, p. 73.
- (3) Jackson J. Benson, *The true Adventures of John Steinbeck, Writer* (New York: The Viking Press, 1984), p. 253.
- (4) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New York: Goldian Press, 1981), p. 93.
- (5) Nelson Valjean, *John Steinbeck the Errant Knight* (San Francisco: Chronicle Books, 1975), p. 92.
- (6) John Steinbeck, “Saint Katy the Virgin”, *The Long Valley* (New York: The Viking Press, 1964), p. 189. 以下同作品からの引用は頁数のみを記す。
- (7) Nelson Valjean, *Ibid.*, pp. 91-92.
- (8) *Ibid.*, p. 92.
- (9) John Steinbeck, *To a God Unknown* (London: Heinemann, 1971), p. 24.
- (10) *Ibid.*, p. 137.

- (1) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (New York: The Viking Press, 1967), p. 437.
- (2) John Steinbeck, *Travels with Charley in Search of America* (New York: The Viking Press, 1962), pp. 70-71.
- (3) Peter Lisca, *Ibid.*, pp. 94-95.